

マルセ太郎のエッセイ

それは私です。

むかしは旅の列車の中で、たまに隣り合った、あるいは向かい合った席の見知らぬ同士が、話しかけたり、かけられたりする風景がよく見られたものである。いまではほとんどない。蒸気機関車の消滅と共に消え去ったものか。そんなことに郷愁を感じているのも、僕はまもなく六十歳になるが、われわれ年代限りであろう。もっとも若い人たちに言わせれば、他人から話しかけられるのは煩わしくてかなわない、といったところかもしれない。

先日、大阪から東京に帰る新幹線の車中でおもしろい人に遭った。

同年代に見つけられるその人は、三人掛けの窓際の席にいて、僕の席は通路側で間は空席である。車内に乗りこんだときから、その人は僕の注意を引いた。あきらかに、「鷲のひと」とわかるので立ちであつたからだ。それも並ではない。一分のすきもなくきまっていた。

色白のきりつとした顔立ちで、薄くなった白髪頭は短く刈りこんである。小柄だが筋肉質の体格に、絞り染めの半袖シャツ、ひざ

のあたりで太くなったズボンが腰の上部で締まっていて、足にびったり、ふくらはぎまでの深い革製の直足袋でぎめている。おかしいくらいにそれは「いなせ」で、若いころ観た新派の舞台を思わせる。

京都を過ぎたあたりで僕は席を立ち、びゅっへに行つて、缶ビール、ミニサイズ瓶のウイスキーと弁当を買つて席に戻つた。上着を脱いで間の空席においたとき、やはりそこにおいてあつたその人の小さなバッグにかつたので、失礼と目で言い上着をわきに寄せた。その人も、いやいや構いませんと目で小さく笑つた。瞬間、この人は話したがつてゐるなと感じたが、そのままに僕はビールを飲みはじめた。名古屋を過ぎたころには、弁当も食べ終えた。しばらくして車内販売が通りかかると、「ねえさん」と呼びとめて、その一つを僕に差し出した。

「いや、あなたがうまそうに飲んでらつてるのを見ましてね」
「これはどうも」
遠慮なく頂戴した。やつぱり話したがつてゐたのだ。僕がその人のいなせな作りで世辞を言つたら、相好をくずし名刺をくれた。思つてたとおり鷲職である。いかにもそれらしい書体で小山某とあり、住所は日本橋浜町である。「江戸っ子」だ。親代々からの稼業で、頭と呼ばれてるらしい。僕は名刺をもたないことをこたわ

り、芸人であると名乗つた。もちろん僕の名を知るはずがない。すると小山さんは「そうですか」と、したしみをこめて感じ入り、あらためて僕のことを「師匠」と呼ぶのがおかしかった。同じ町内に、江戸家猫八さんがいて、付き合ひのあることや、ことに玉川スミさんとは、むかしからのひいきで、浅草演芸場によく花を贈つたなどと、僕の知つてゐる芸人の名前が次々と出てくる。なかなかの通である。八年ほど前につぶれた、いわば僕らの拠点であつた浅草演芸場は、こういつた下町のファンで支えられていたんだなと、あらためて思つた。

話がちよつと途切れそうになつたとき、小山さんは言つた。「そう言や、なんて言いましたかな。サルの滅法うまい芸人がいましたね」
やつと出てきた。
「それはわたしです。
マルセ太郎です」。

(1993年「室内」)



編集後記

5~6年前からこのマルセ太郎だけの新聞という情報誌みたいなものを作りたいと思った。そんな予感があったのだが、マルセ太郎自身が、芸人魂以来、新聞、雑誌に書き始めた。誰かがやるかなと思つてゐるうちに、今度は「劇作家」マルセ太郎が登場する。そして、病気。もう、やらなければと思った。40の手習いでパソコンをやりだしたのもこんな理由だ。東京の情報よりも地方でのマルセ太郎をめぐる情報の方が面白く為になる。旅のマルセさんは実に、いきいきしている。だから、情報の中心は地方におく。「マルセ太郎もいる」ところよりも、「マルセ太郎しかいない」ところの方が面白いに決まつている。内容は何でも構わない。マルセレポートでもエッセーでも、ライブの感想でもイイ。マルセ語録も集めたい。この世紀末に文化と呼べるものがあるとすれば、それは、マルセ太郎とめぐる人々ではないかという思いこみを新たにしているところである。

下書きを見せにマルセ家を訪ねると富山の市会議員(全国で最も議員らしからぬ議員)赤星ゆかり嬢がいた。屈託のない笑ひは、この新聞の創刊にふさわしい、出会いのような気がした。(立木寅児)

広告募集中!

「広告募集」

どんな広告でも構いません。
大きさは、一枠 縦5センチ×横6センチ
料金は、未定
ワリカン新聞なのでその内、妥当な金額が決まってくると思ひます。
ライブそのものを広告して下さいませぬよ。

漫談や講談とも違う。いわゆる「一人芝居」といったものでもない。それは今まで私が観た、どんな話芸とも異なるものだった。いったい、これは何と呼んだらよいのだろうか。

文字通りの一対一となつてしまつたその劇場の中で、私はステージからこちらに向かつて解き放たれてくる強烈な個性を、何か不思議な思ひで感じていた。

もはや忘れようにも忘れられない、マルセ太郎ライブ・ステージとの最初の出逢いだった。

そしてこの後、月に一度開催される「マルセ太郎ウオードビル」を観るために、私はしばらくの間「プランB」に通いつめることになる。



この人を「認定患者第一号」とすることには異論があるようで、ただいま関係各方面とも協議中でありませぬ。病原菌の正体が不明でもありますし発症例は他にもあるとの報告が入っております。感染経路は非常にハッキリしているわけでありませぬが、潜伏期間がかなり長いのと本人の自覚が唯一の決め手となりますので、関係各方面はかなり苦慮しております。なにせ、関係各方面はいまや、忙しいんだから。皆さん！我こそは「認定患者第一号」だと思われれる方、感染経路を明記して申告して下さい。

ぐるぐるの読者便

群馬県・(保育所つめくさ) 船戸咲子

機関紙「さるさる」の発刊おめでとうございます。送ってくださりありがとうございます。

ここにも三人、マルセ中毒症状の出ている者があります。保育所で仕事をされる者は、あの、マルセ太郎の透明な感覚にまいつてしまっています。〇オのこどもの中にある透明感と共通する、生きる思想を見ます。

マルセ太郎ライブ情報を見ると大阪までとんで行きたいくらい。それもなりませぬので九月一四日(土)にJannanに行く予定を立てています。

マルセの喜劇は「人のくらしそのものは喜劇なんだ」と思わせませぬ。これも幼児の感覚のするどさと似たものです。

豊橋市に住む内藤勲氏の

「似顔絵ツッセイ展」レポート

名古屋在住

水谷厚子

名古屋・水谷厚子の手紙より
有名人の似顔絵に思い入れたっぷりのエッセーを添えた「似顔絵ツッセイ展」の活字、そして「映画」を一人で演じる「マルセ太郎

豊橋に住む内藤勲さんが書いたイラスト
1996年7月1日朝日新聞より



郎」の似顔が目飛び込んでくる。マルセ太郎さんの目がまさしく「きつちゃん」である。豊橋(愛知県)在住の会社員・内藤勲さんの個展の新聞記事。

さっそく電話でのインタビュー。見知らぬ人へのしかも、インタビュになるものは初めて。どうなるのかなと思いつつピッポッパ 電話のむこうから低い落ち着いた声が聞こえてくる。

「もしもし」「内藤さんですか」「ええ」「私、名古屋の水谷と申します。実は」「マルセ太郎さんの『スクリーンのない映画館』をどこで観られたのですか」「えーと、ちょっと待って下さいよ、2、3分間、電話の向

こつには、だれもない。このまま受話器を置いてしまおうかな? 「2月でしたかな シアターでの」「泥の河」ですネ」「その」「観ていかがでしたか」「」「新聞には、ラストは涙が止まらなかつた。目ではマルセ太郎をみているのだが、頭の

中では映画をみているという錯覚とありますネ。本当にそのとおりですネ。いつごろからマルセ太郎さんを御存知ですか」「猿の真似を以前に観て」「他の映画は観られたことありますか」「いえ」

初めからそうなんだが、だんだん私の声のトーンが落ちてくる。もう終わりにしようと思いつつ、終わりのきつかけをつかめず、何やらしゃべっているだけ。勇気を出して「お忙しい時に暇をとらせてすみませんでした、では」「受話器を置いてホツと。

「見たい見たいと念じたマルセさん」

広島マルセ中毒の会代表 石口俊一(弁護士)

今年の五月三日、広島憲法集会で、マルセ太郎さんに「憲法高座」と称して話してもらいました。送迎の車の中や、前日の夜、更には上演前の待ち時間に、直にいろいろと話しましたが、あこがれのスターに会う前のような胸のときめき(?)も、次から次に飛び出してくる話しの煙にまかれ、こんなおもしろい叔父さんだったのかと益々中毒度が増してしまいました。なかでも、マルセさんが我が家を失うかどうかという裁判に巻き込まれ、出て行った裁判所の中での体験談が実に面白い。私の生業が弁護士なので、ついつい普通の当たり前のやり方と思ってい

ることが、マルセさんの口から聞かれるとブラックユーモアそのもので、苦笑いの連続。マルセさんの息子も今年から弁護士とか、個人的にはレパートリーの中に、「マルセ裁判物語」を加えれもえればとも思つた次第。

広島づいたマルセさんを、もっと広島づかせたいと願っています。

確か「泥の河」の原作者・宮本輝氏とマルセ太郎さんとの対談の中で、「退屈なものの中で、他人の旅行話を聞かされるのと、観ていない映画の話面白そうに聞かされることだ、その退屈なものに挑戦してみようと思つた」という下りがあります。映画がごの他好きな私には、この箇所を読んで、延々と映画の話をする私の前で、まだ続くの? つてな話を聞いている妻や友人の姿が浮かび、思わず苦笑いしたもので

す。噂だけ耳にし、見たい見たいと演じていたマルセさんの「泥の河」に巡り会えたのは早や六、七年前のこと。九〇年に「生きる」、九一年には「殺陣師・段平物語」と続けば、マルセ中毒になるのは当たり前! とこころが、マルセさんのどこが何が面白いかを他人に話そうとすると、結局最初の退屈話に戻ってしまうこのジレンマ! そつだ! 手つとり早いのは、マルセさん本人を見せることだというのが今回の広島連続公演なのです。(広島マルセ中毒の会機関紙より)

「芸人魂」172ページに登場する渡辺均二さんの投稿
お忘れの方は、今一度お読み下さい。

「一隅を照らす」

元・高津高校教諭
渡辺均二（広島在住）

太郎さんと筆者、この両名は若い頃三年間一ツ釜の飯を食った間柄。場所は大阪府立高津高校。小生（＝英語屋）のほうが偉そうに教え諭す側、太郎さんは専ら辛抱して聴いてくれる側、という関係でした。

「高津」というのは大阪の名門校の一つで、「自由」を標榜して異彩を放っていた存在でした。旧制中学の頃は、「東の五中」（元東京府立第五中学）・「西の高津」と並び称され、「進学校」ではなく、斬新な試行を重ねる学び舎でした。因に、当時五中生は背広を制服として着用、世の注目を浴びておりました。また、高津では「オーラル・メソッド」による英語指導が熱心に行われ、各地から数多くの方が授業参観に見えたりしていました。

太郎さんは高三になると、小生のクラスに入りました。その教室は校舎の西南の隅にあり、そのまた西南の隅の席に太郎さんはデンと腰を据えて、とうとう最後までその陣地の占拠を続けました。この特定の隅は当初、小生には太郎さんの個人用シェルターのように見えていたのですが、徐々にこれは彼専用のブリッジ・ヘッドの観を呈し始めました。それもそのはず、彼はすでに演劇部の強力なキャプテンであり、生徒自治会の中の一國一城の主とも言つべき存在であったのです。彼が執拗にこの座席にこだわるので、こちらも「隅・隅・隅」とこだわっているうちに、「一隅を照らす」という一句が頭に浮かび、爾来この名句は私の頭の中で常に太郎さんのイメージとオーヴァラップしており、この一句は私にしては上出来ではないかと、一人にんまりしている次第であります。

太郎さん著すところの『芸人魂』を読ませてもらいましたが折の感激は今でもまさまざと脳裏に焼きついております。「太郎さん、やったぜ！」と心の中で叫びながら、貪るように頁をめくり、読み終えたのは朝の四時半でした。賛嘆・満足・誇らしさ！日本という歪んだ社会の中で、しかも芸能というキメ細かい世界の中で、素質には恵まれているにしても、よく此処まで造り上げたものと感無量。満腔の敬意と祝福を

太郎さんに捧げたいと思います。太郎さんに大きな期待をかけて「あいつはやるぞ！」とよく言っておられた高津の先生方もボツリボツリと鬼籍に入られました。このような方々に今の太郎さんの至芸をぜひ観ていただきたいものと、痛惜の念に堪えませんが、太郎さんのご息もまたすばらしい。今年から弁護士さんだそうですね。今後ともいろいろとご苦労があると思いますが、どうぞこのユニークなオヤジさんと力を合わせて、正義と公正と平和のために、ご健闘くださるようお願いいたします。

特別手記

マルセ太郎中毒病認定患者第一号
芸人魂第一章に出てくるマルセ太郎中毒病認定患者第一号ともいわれている方です。強力な病原菌の持ち主で現在でもライフに出没しています。

僕が、あの、立った一人のお客です
神奈川県湯河原町在住
安達原 智彦

「たった一人で観た夜に」

確か今から十数年前の2月頃、とても寒い日曜日の夜のことだったと思う。私は中野新橋という駅で地下鉄を降りた。「プランB」という小ホールを訪れるためである。その当時私は、映画・演劇から

始まって、寄席・演芸や、どこかの小劇場で行われるパフォーマンスなどをあちこちと観て回るといったことを続けていた。一般的な人気や話題にはとらわれず、自分自身が本当に面白いと感じられるものを観たいなどと、生意気にも考えていたのだ。だが、そんな出し物にそうおいそれと出会えるはずもない。

ちょうどそんなとき、情報誌の1ページで見つけたのが、「マルセ太郎ヴォードビル」の小さな記事だった。マルセ太郎。名前は知っている。猿のマネがうまいコメディアンとして、テレビや新聞で何度か見かけたこともある。でも、直接その舞台を観るのは初めてだった私は、テレビと同じようなネタを、独演会でもっと時間をかけて演ずるのだから、くらいにしか考えてはいなかったのだ。とあるマンシヨンの半地下に続く階段を降り、今晚の舞台となる「プランB」内に入ってみると、そこは私が想像していたいゆるゆる「劇場」とは、かなり違った場所だった。板の間でスッピンの場内。コンクリート打ちっばなしの壁。ひどく殺風景な空間……。

座布団の一番前に、所在なく座り込む。こんなところで、ベテランの芸人さんが独演会なんかやるのだからかというのが、そのときの私の偽らざる気持ちだった。まあ、いくらなんでも俺一人ということはないだろう、などと思っていたのだが、そのまま実にあつさり、開演の時はやってきてしまった。

ステージ下手の扉が開き、小柄なオジサンがステージに登場した。まさしく、いつだったかテレビの演芸番組でお猿の形態模写を演じていたコメディアン、マルセ太郎その人である。「きょうは日曜日の夜ということもあつてか、大変に小さな会となつてしまつたのです……」ガランとした客席に向かって、ベテラン芸人の声が響き渡る。私他に、客はいない。この時私はイヤも応もなく、マルセ太郎の芸を自分一人で受けとめなくてはならない立場に置かれてしまったのだ。まいったな、どうしよう。こんなことは初めてだ。私の困惑をよそに、ますます熱を帯びてくるステージ。その話は、演者自身が子供時代を過ごした大阪での日常風景（これがまた面白い）から始まって、高校時代からの友人だった中岡という人の一代記、とでも言うべきものになつていった。

病棟日誌

「こは、ファンの交流の広場です。どしどし投稿をお願いいたします。」

マルセ太郎さんと私

お詫びの多い手記

名古屋大学 農学部
遺伝子制御学研究室

名古屋市

鳥居恭好

マルセ師匠に関する最初の記憶らしい記憶は十数年前の「花王名人劇場」です。その前にもマルセさんを見たことがあったらしく「へえ、この人も出るんだ名人劇場」と感じたように思います。内容はまるっきり覚えていません

(こめんなさい、すでに千秋美のようなワタクシです)。ただ記憶に残っているのは、マルセさんの持ち時間の後に流れた公演の予告と、舞台用ポスターのマルセさんの似顔絵(山藤章二さんの筆になるものだったように思いますが、これもあやふや。面目無い)。それが中学生の頃だったと思います。それ以来マルセさんのことは記憶の奥底に封印されています。

(5) 大学二年の頃、何で知ったのか定かではありませんが、名古屋大

須の七ツ寺共同スタジオ行われるマルセ太郎の「スクリーンのないロードショウ」を知りました。演目はフェリーニの「道」。大好きな映画の一つだったため、軽い気持ちで足を運びました。客席はがらから(後で聞いたところによると、毎年一、二回行われる大須での公演のうち最も不入りの回だったそうです)。始めて入るスタジオ

オはどことはなしに不気味に感じられました。靴を置いて開演を待つあいだ、薄暗い場内には澱んだ空気が漂っていました。これはマルセさんの会に特有のもではなく、スタジオ自体の体臭であることなど当時の私には知る由もありません(スタジオ関係者の皆さんこめんなさい)。

まもなくマルセさんが登場、第一印象は「小さい人」「恐い顔の人」。しかしお馴染みのサルの形態模写やヨーロッパの旅芸人の話、国家と国歌の関係など、すぐにマルセ太郎の世界に引き込まれました。そして本編へ…内容は私の拙い筆には余りまず、勘弁してください。驚きの連続でした。「さるさる」読者の皆さんなら充分お判りいただけるでしょう。この映画は何度も見ており、あのシーンの次はこのシーン」等とすべて知っているつもりでしたが、あさはかな私がボロボロに泣かされた事実を申し添えておきます。私はもともと落語ファンで、芸の

最高峰は落語と信じて疑ったことはありませんでした。そんな硬直した私の見方を易々と粉砕してくれたマルセさん

に心から感謝しています。七ツ寺スタジオ公演の打ち上げはいつも、すぐそばの居酒屋の座敷で行われます。私もノコノコ付いていきました。その日はスタッフを中心として男ばかり10名程が集まっていました(今では、入り切れないファン、それも麗しい女性ばかりがマルセさんを取り囲んで帰そうとします。本当です)。マルセさんに「どうだった」と聞かれ、緊張の余り狼狽した私は、素直に「感激した」という言葉が出てこず、「なんか体が重そうに感じました」等と聞いた風なことを…無神経なガキでした。こめんなさい。マルセさんはお忘れかもしれませんが、謝らせてください。マルセさんは一瞬下を向き「ああ、そう」とつぶやき、向き直って「まあ、芸人の苦しんでるところも見てよ」とおっしゃいました。その日は薬を飲んだの熱演だったことその後知りました。

マルセさんはそれから色々とお話してくださいました。映画の話、韓国の葬式における女性の泣き方のものすごさ、泉和助の思い出等々、すべてが大切に思えて、帰りの電車の中で思い出しながらメモに書き起こしました。それから十年近くが経ち、私も

その後のそのおばちゃんスチューワーズの顔が何ともいえずいい。「そういうことらしいわよ。」

さあ、荷物をあげてちょうだい。」という視線を父に投げかけた。父は席について言った。

「梨花、日本のスチューワーズ

デスとは全然違うな。第一日本のスチューワーズだったら、『どうしたの?』なんていわない。きつちりとした丁寧語で、同一化されたで、訓練されてる、という感じだもん。ここでは、髪型も化粧も立ち振る舞いも、それぞれだ。ウーピー風なそのスチューワーズは、私達の横を通りすぎる度に、いい顔を向けてくれた。(梨花)



マルセ太郎中毒患者です。永六輔さんの本に「何言ってるんだい! あたしはね、六代目に舞台の上から見つめられたんだよ! あたしより幸せな人間はいないんだよ!」と言うおばあさんの話があったと思います(永さんのお母さんだったかもしれない。また記憶があやふやですみません)。三年ほど前、打ち上げの

後、名古屋名物味噌煮込みうどんを食べに行くことになりました。外は雨、私の普通より一回り大きな傘を見てマルセさんが「ああ、入れてっつてもらおう」とおっしゃったので、相合い傘で、雨に唄えば」を唄いながら大須の町を歩きました。それ以来私は件のおばあさんと同じくらいの幸せ者なのです。

トピックス



衛星放送開局以来の反響



山田洋二監督！大うけ



芸人魂 TVドラマ化



続・芸人魂 今秋には発売



さるさる全国で大反響！

全国で、唯一の新聞「さるさる」が大きな反響を呼んでおります。世紀末を飾り、21世紀を占い、マルセ太郎中毒患者を励まし続ける新聞として今後の活躍が大いに期待されている。としかいいようがないのだ。

7月8月の猛暑の中800枚にもものぼる原稿が講談社に届けられました。「今度は、普通」と控えめな発言をしていたマルセ太郎でしたが、生原稿を、マルセ太郎評論では定評のある「ママ」に見せたところ「あんたー！おもしろいわ」との評価を受け大いに気をよくしていました。

順調にいけば、今秋にも書店を飾ることになるでしょう。

マルセ太郎中毒患者宣言・草案募集

本誌では、マルセ太郎中毒患者宣言を募集しております。過去のあらゆる宣言に負けない格調高い宣言文をつくりましょう。草案を編集部までお寄せ下さい。

去る、某日、国営放送で放映されたドキュメンタリー「マルセ太郎の芸人魂」は、開局以来の反響をまきおこした模様。同局では番組モニターを雇っているらしいが、その多くが「感動した」とのコメントを寄せた。市民の間では番組を収録したビデオテープが密かに出回っているらしいが、この局は著作権ではうるさいのもう一度見たい方、まだ見てない方は再放送を要請しましょう。「今度は、衛星放送じゃないチャンネルでやってよ！

番組を見た山田洋二監督より手紙が届きました。もちろん「男はつらいよ」の山田洋二監督ですよ。さっそくマルセは返事を書きました「芸人魂」を添えて。お互い、目と鼻の先に住んでいるんですから会ってほしいな（ファンの声）そういえば、Beフリーがちょうどまんなかにあるなー。

ドキュメンタリーの制作を担当した東映のテレビ部が今度は、「芸人魂」のドラマを企画中。監督をした梶間氏は「僕は、もう最初からドラマしかないと思ってたんですよ。」と、鼻息もあらく話しておりました。

ニューヨーク物語

第一話

今年の一月、「東方の三賢人」という映画の撮影のため、父の付き人として十日間ほどニューヨークへ行って来た。

前日まで仕事があつてかなり疲れた様子で心配したが、空港に着くなり、いつものように目についたものを私にしゃべり始めた。

「梨花、前に座っている人見たことないか。」

「え、誰？。知らないよ。」

「あれは絶対モデルだな。じゃなかったら駆け出しの女優だ。横に座っているのは、多分マネージャーか何かだろう。」

「何でわかるのよ。」

「顔をよく見てみる。」

「若いのに肌が荒れているだろ、あれは過密スケジュールのせいだな。」

「……。」

こんな調子だ。真実のように話すから、普段の会話でも自分の知らないことについて断言されると、「へー、そう

なんだ。お父さんで物知りね。」という事になり易い。だからこれから書く父のニューヨーク観も、事実を半分として聞いてほしい。「一を聞いて十を知る」というより、「一を聞いて全てだと思ひ込む」ところが彼にはあるから。

それはさておき、さっそく機内へ乗り込んだ。ユナイテッドエアライン、アメリカの航空機だ。スチュワードスも乗客も八割がたがアメリカ人、成田を飛び立つ前から確かにそこは異国の雰囲気だ漂っていた。

自分の座席を見つければ荷物を棚に上げようとしたら、もうすでに大きなものが入っていて、いれられない様子だ。横からウィービーゴールドバーグのような黒人のスチュワードスがチューインガムをかみながら、「どうしたの？。」とやってきた。英語が上手く出さずもっている父に、「ちよっとどいて。」と聞いて彼女は中にあるものを確認しようと取り出した。みるとペットを入れるための箱の中をのぞこうとしたり、揺すったりした。私は一瞬爆発物かしらと、良からぬ予測をしたが、すぐにそれが何でもないことがわかった。前の席の中国人女性のもので、中のペットは機内にあずけてあるのだった。

(3)

演劇情報

マルセ太郎作・演出
劇作家マルセ太郎
の芝居情報

マルセ喜劇第4弾

「真夏の夜の哀しみ」

或る夏の日、「テレビに出るのが、そんなに偉いんか」とひと言残して老芸人が逝った。その通夜に集まってきた様々な芸人たちが

「まだ生きとったんか」
「何でこのくそ暑いとき」
芸人達のとりとめのない会話はやがて・・・。

「生きているときに言わんかい」
マルセ喜劇待望の第4弾。乞うご期待！

出 演：齋藤昌子 松岡文雄

矢野陽子 葛飾刻斎

今野 誠 永井寛孝

松山 薫 藤原常吉

維田修二 千葉真弓

期 日：1996年9月

12日(木)～16日(月)

会 場：渋谷ジャンジャン
スタッフ

舞台監督 塩見なぎさ

照明 日高勝彦

音 効 是安房雄

宣伝美術 花本 彰

	昼	夜
12日		19時
13日		19時
14日	15時	19時
15日	15時	19時
16日	15時	19時

チケットのご予約はお早めに

お問い合わせ
渋谷ジャンジャン
031346210641
制作 マルセカンパニー

八月一日に出演者、スタッフによる初顔合わせが人力舎の稽古場でおこなわれました。
今回初参加の井田修二、藤原常吉、千葉真弓の紹介のあとマルセ太郎より今回の芝居の話があり稽古日程が決まりました。
れいによって、本はまだできておりません。この分だと、出演者全員、お盆休み返上で芝居漬けになる模様です。

役者紹介

今野 誠

前作「枯れない人々」ですっかり役者さんで定着した今野さんは、実はマルセ太郎のマネージャーさんなのです。何であんな芝居ができるのと驚かれるむきもあるつかと思いますが、何を隠そ



う、今野さんもその昔、芸人さんだったのです。「ボンコツ5重奏団」という、コミックバンドの名前をご記憶の方もあるつかと思いますが、当時、譜面の読める芸人さんとしてまわりから一目おかれていたそうです。海軍軍楽隊で堪えた腕前を、前々作では舞台でその腕前を披露してくれました。味のあるせりふまわしで、大いに楽しませてくれ、爆笑を誘っていました。一になにせ、何十年も東京で暮らしていながら、秋田ことばで生きてこられたんですから。皆さん、お年を聞くとびっくりしますよ！何せ、マルセ太郎より年上なんです。今回は、芸人さんそのまの役だそうです。
「せりふを覚えるのが精一杯だよ。前の時、暮れも正月もなかったもんね！
「だけど、マルセのせりふをそのまましゃべってドット笑いがくるんだもんね。」
（もちろんだ、これを秋田弁で話すので、皆さんは自分で想像してください。）
最長老の新人役者に乞うご期待！

マルセ太郎 大スペシャル

マルセ太郎の集大成！

連続五夜

泥の河

中村秀十郎物語

殺陣師段平物語

息子

生きる

十二月十九日(木)～二十三日

(月) 毎回午後七時より1回のみ

二十二日・二十三日午後五時から

お問い合わせ：スタジオBeフリー

0334307328

マルセ太郎中毒患者会

全国大会を企画中

全国のマルセ太郎中毒患者の

皆さん！地元狛江に集まれ！

これは決して博打ツアーでは

ありません。

十二月二十二日ライブ終了後

病原菌を困るの大交流会



芸人マルセ太郎の珠玉の名著！

面白くてためになり、可笑しくて哀しい！

げいにんだましいい 芸人魂

講談社

お近くの書店で、ご注文下さい。 定価千八百円

色川武大さん、マルセが本を書きました。
あなたが愛した芸人が、
可笑しくて哀しい人々を鮮やかに書きました。
彼の演技力は、
この観察力、洞察力が支えていたのです。
この本を開けば、
そこに小劇場、そして開幕です。

永 六輔

		泥の河		真夏の夜の哀しみ	
10月8日(火) 大阪 厚生年金大ホール	10月3日(木) 町田市民ホール 第4会議室 前売 ¥2000	9月27日(金) 28日(土) 青森だびよん劇場	9月22日(日) 青梅おやこ劇場	9月12日(木)~ 16日(月) ¥2800 渋谷ジャンジャン 03-3462-0641	
	町田市に特別養護老人ホームを建設する会 0427-93-5622				<p>詳細は各主催者に直接お問い合わせ下さい。 協力 人力舎 03-5378-0211</p>
中村秀十郎物語	中村秀十郎物語				
10月28日(月) 富山	10月27日(日) 山中	10月19日(土) 小倉	10月13日(日) 北九州	10月9日(水) 大阪 女学院短期大学	
			生きる	泥の河	殺陣師段平物語
11月7日(木) 横浜	11月6日(水) 明石	11月3日(日) 神戸	10月31日(木) 上矢作	10月30日(水) 瀬戸 康々亭ピースフルホール	10月29日(火) 名古屋 長円寺会館 ¥2500
				康々亭 0561-84-6644	水谷 052-202-1339 井上 052-759-1122
11月27日(土) 京都	11月22日(金) 京都	11月21日(木) 徳島	11月19日(火) 北海道深川	11月13日(水) 札幌	11月9日(土) 野田

純米酒専科

真酒亭

マルセ太郎中毒患者は富山へ来たたら、真酒亭でアルコール消毒を受けること！
合い言葉「さるさる」と言えば大サービス！

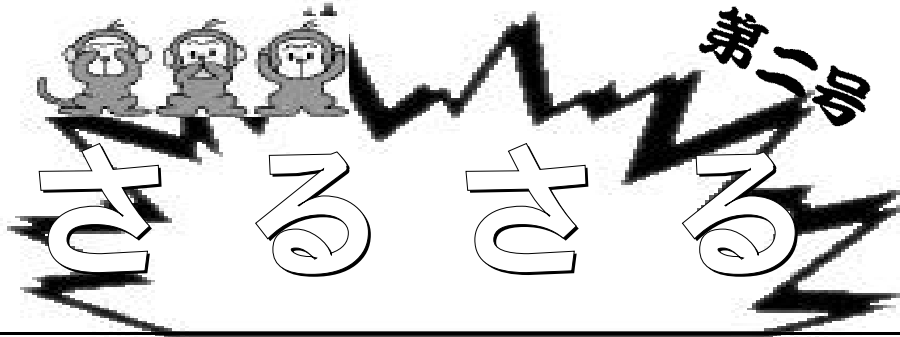
〒170-0001 東京都豊島区西池袋2丁目6-20
TEL 03-3564-4103

Family pension 「芸人魂」・各部屋に完備！

さらら館

金沢市菊川1-1-8
TEL0762 (21) 4772

『美しき川は流れたり そのほとりに我は住みぬ...』
と室生犀生が詠った犀川べりに建つさらら館。全室冷暖房、バス、トイレ付き。兼六園や文学散歩、ショッピングにも歩いて廻れる便利な環境。ファミリーペンションサララ館は二度め、三度めというお客様も多い、アットホームなお宿です。



全国マルセ太郎中毒患者会
機関誌「さるさる」
発行：スタジオBeフリー
編集責任者：立木寅児
〒201東京都狛江市岩戸北1-7-9
協力：(株)プロダクション 人力舎
定価：¥100
年間購読料
部数 × [¥100+送料(¥100)]

「行儀

マルセ太郎



いままでは原則として、学校公演は断ることにしているが、六年ほど前、福島県のP中学校にいった。開演前、校長室で控えていた。その校長先生が言ったのである。「うちの生徒は、日本一行儀がいんですよ。」笑っている顔を見て、僕は、日頃手を焼いている生徒を皮肉っ

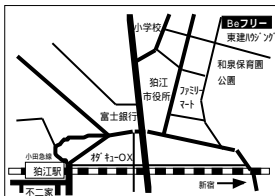
た、謙遜の言葉と解釈し、「いや、馴れておりますから」と答えた。これがとんでもない誤解だったのである。校長は本気で自慢していたのだということが、あとで分かった。体育館が会場になっている。舞台わきで、僕は用意していた。見ると会場の四隅に、竹刀を持った教師が立っている。やがて揃った

足音が聞こえ、生徒たちが整列して入場してきた。クラス毎に入口で、級長が「一年一組入ります」と大声で叫び、ひざを高く上げ、両手を大きく振る行進である。次々に「年組入ります」と入ってくる行進に、一糸の乱れもない。日頃の訓練の賜物であろう。三学年全生徒が集まるのに、二十分ほどの時間がかかった。ささやかな私語がきこえた途端、「静かにしろ」舞台わきの竹刀を持った教師が怒鳴った。そして彼は続けた。「これから、マルセ太郎先生の公演が始まる。緊張して聞くように」促されて舞台上上がった僕の前に、全生徒はシーンとしている。誰かが合図をしたのか、機械的に拍手が鳴った。それは異様な、悲しい光景である。僕は芸を始めた。学校ではあり勝ちな、騒がしげがない。たしかに行儀はいい。しかしトリやサル形態模写をやっても、一人として笑う者がいないのだ。さすがに僕も途中で、「これは授業ではありませんから、楽しんで」と誘ったが、そのままの状態、二部の「泥の河」にまで至ったのである。校長先生の満足そうな顔が浮かんだ。



トークンスタジオ **Beフリー**

マルセ太郎の住む狛江の小劇場
100人の顔の見える小劇場



音響・照明完備
映像設備有り
ライブ・催し物
格安にて

マルセ太郎の公演のご相談は

出前小劇場



出前持ち
内田直樹

内田事務所 〒151 東京都渋谷区代々木2-19-3野崎荘10
PHONE (03) 3378-6458 FAX (03) 3378-6582

全国マルセ太郎中毒患者会
機関誌「さるさる」

最近！手が震えたり、ぶつぶつと独り言を言ったりしませんか
そんなとき、さるさるを手にしませう。

お申し込みは

郵便振替 00140-9-758475

トークンスタジオBeフリー

TEL : 03-3430-7328
FAX : 03-3430-7531

カンパよろしく!